

## 《私》という偶然をめぐつて

大谷大学准教授  
脇坂真弥

ただいまご紹介に与りました、大谷大学の哲学科教員の脇坂真弥と申します。今日は、タイトルにありますように、「私がこの《私》であるという偶然」というややこしい問題を、私の専門分野である「哲学」に絡めながら少しお話できればと思っております。このような場所に上がるのがはじめてですので、うまくお話できるかどうか不安ですが、一時間どうかよろしく願います。

### 一 共に生きることの難しさ——「そこは私が日向ぼっこをする場所だ」

今回、この講演のお話をいただいた時に、まず私でよいのだろうかということをとて迷いました。というのも、私はいま申し上げたように「哲学」が専門分野で、しかもひたすら本だけ読んで考えているような古い方法で勉強をしています。先ほどお話を伺った高木先生のように、実際に人の悲しみの現場、死の現場に立ち会いながら、し

っかりと仕事をしているわけではまったくありません。

しかも、私は哲学を専門にする人の中でも、けっこうひねくれ者かもしれません。たとえば最近よく言われる「絆」という言葉、この言葉を私はほとんど使ったことはありません。それどころか、自分があまり使わない「絆」という言葉を耳にするたびに私が感じるのは、「絆」はそんなに簡単に結べますか、ということですよ。むしろ絆はなかなか結べない、人間同士というものは互いが互いの領分を主張しあつて、余裕がある時は仲良くできて、いざ余裕がなくなれば場所の取り合いになるものではないでしょうか。もちろん、その中でぎりぎりまで相手のことを考えて踏ん張れる立派な人もおられるでしょう。でも、多くの普通の人たちは、余裕がある時は仲良くできて、限界に來るとその余裕を失つてしまふ、むしろそれが人間じゃないか、と思うわけです。それほどまでに《共に》生きるということは難しいことのように私には思えます。

たとえば、哲学者のパスカル（一六二三—一六六二）は「そこは私が日向ぼっこをする場所だ」という言葉を挙げ、これが全地上の横領の始まりと縮図だと言っています。<sup>1)</sup>これはある意味その通りであつて、私自身もまた「そこは私が日向ぼっこをする場所だ」と、限界がくれば誰かに必ず言つてしまふ弱い——立派ではない——人間であるように思います。今そう言わずに済んでいるのは、たまたま運よく私がそう言わずに済むところに、まだ余裕があるところにいるからというだけではないだろうかと思うわけです。少し運が悪いところに置かれれば、メッキが剥がれて、私が思つてもみなかった私が突然顔を出すのではないかと。

こんな風に、いわばちよつとひねくれて考えている人間がここでお話するのは、学会の趣旨にも合はず、よくないのではないか。失礼にあたるのではないか。そう思つたので、お話をいただいた時に「私でよろしいですか、そういうことを話しますけど、かまいませんか」と伺つたら、なんと「はい、いいですよ」というご快諾をいただ

きました。それで、今日ここに立っているというわけです。

さて、私はいま「絆」というものはそう簡単には結べないのではないかと申し上げました。しかし多分、実際に現場でボランティアをし、人と人との間を取り結んでよい社会を作ろうとされている方々は、「そんなこと、言わなくてもわかっている、そんな簡単なものではないことくらいわかっている」と仰るだろうと思います。簡単に結べないからこそ、それほど結ぶことが難しい絆をどうすれば結ぶことができるか、誰かと《共に》生きることがどうしたらできるかを、実際に現場におられる方々は必死に考え、具体的に実践しておられるはずです。

そして、じつはもちろん、私自身も「人間は人間に対して狼である」とだけ言いたいわけではないのです。この後少しずつお話していくように、私もまた、誰かと一緒にいること、誰かが《共に》いてくれること、誰かと《共に》生きていくことは、決してはかない理想や夢幻ではなく、この現実の世界の中でちゃんと起こるのだと思います。そして、そのことにはとても深い意味があるはずだと考えています。

ですが、その時に起こる《共に》ということは、人と人の間の本当の絆や共感がもともと簡単なものではないからこそ、非常に稀有で貴重な意味を持つのではないのでしょうか。人間というものは、ひとたび余裕をなくして運が悪いところに置かれれば、「そこは私が日向ぼっこをする場所だ」と最後には言ってしまうような弱い存在です。そして、そうであるからこそ、そういう存在が互いに共感し合い、《共にいる》ことができるということはひとつの《奇跡》のようなもので、もしそれができるのだとすれば、それにはとても深い意味があると私は思うのです。先ほどの高木先生のお話の、その深い底で起こっているのは、そのような《奇跡》だと思っています。

「絆」という言葉を聞いて、そんなに簡単に結べますかと思うひねくれ者の私は、《共にいる》ということが、まるで奇跡のように、言葉にならないとても深いところで実際に起こることの意味を、その《奇跡》とは何かという

ことを、「哲学」として考えます。今日してみたいのはそういうお話です。

## 二 哲学が求める知

さて、では少し話を戻してみましよう。最初に、私は自分の専門分野は哲学だと申し上げました。ですが、そもそも哲学とは何をする学問なのでしょう。

もちろん、哲学を勉強すると、たとえば「よく考えるようになる」とか「人といろいろなことを自由に議論できるようになる」とか「物事にじっくり取り組めるようになる」とか「論理的になる」とか、いろいろな役に立つものが手に入ります。ですが、ちょっと考えてみてください。そういう便利なものはおそらく哲学以外のところからでも手に入ります。とくに「哲学でなければならぬ」ということはありません。だとすると、「哲学でなければならぬ」「哲学でなければ得られない」ものとは何なのでしょう。哲学はそもそも何について、どんなふうに考えていこうとする学問、どのような「知」を求める学問なのでしょう。

ここには哲学科の学生さんも来られていると思いますし、哲学に興味がある方もたくさんいらっしゃると思うのですが、「哲学でなければ得られない知」、「哲学とは要するに何をする 것인가」をはっきり言葉で言うことができるのでしょうか？

これにはいろいろな答えがありうるでしょう。そのひとつとして、たとえば「哲学とは物事を徹底的に《根本から》考えることだ」というものがあり、私もその通りだろうと思います。ですが、これではじつはまだ十分に答えたことになりません。たとえば、「どうして人は愛するのだろうか」と徹底的に《根本から》考えなくても、そんなことを考えるより先に、私たちはすでに誰かを愛しています。愛されなくて悲しいと思います。「生きるとは何か、

どうして生きているのだろう」と《根本から》考えなくても、そんなことを考えるよりも先に、私たちは今ここでもうすでに生きています。今ここでもうすでにやっているそのことを、どうしてあらためて《根本から》考えなければならぬのでしょうか。

さらに、哲学が求めるその根本的な「知」というのは、あまりにも根本的過ぎて何かしら言っても詮無いことのようにさえ思えます。つまり、哲学が何事かについて「これがその《根本》にある知だよ」と言ったからといって、それは哲学以外の他の知識のように生きていく上でとても役に立つような、いわゆる有用な知識ではありません。たとえば、医学や化学などの科学的知識や、ITの技術や語学、あるいは法学や経済学といった領域の知識なら、きつとそれは身につければ役に立つし、社会を直接に大きく変える力も持つでしょう。ですが、哲学が示す知によって、人の何かがすぐに大きく具体的に変わったり、社会が変わったりすることは、おそらくありません。それどころか、哲学の求める知というのは、それをあえて言葉にして、しかも難しい言葉ではなくできるだけ平易に言うとうとすると、何だかともありきたりな、ありふれた、陳腐な、言いたいことが上滑りするような言葉にさえなりかねない、そういう何かであるように私には思えます。

「哲学」とはおそらくそういうものです。わざわざ考えたりしなくても、すでに私に起こっていること、私がすでにしていること、そしてそれをあえて取り上げて言ってみるまでもないようなことを哲学は取り上げます。しかも、その知は、知識を広げるという意味で役に立つものではありません。さらに、その知について語ろうとすると、ものすごく難しい言葉になるか、あるいは逆に何かありふれた上滑りな言葉になってしまうかのどちらかです。

ですが、ここでもう少し積極的に考えてみましょう。自分にすでに起こっていることについて、あえて「これはいったいどういうことなのだろうか」とふと考えてみる——それは私たちが「自覚」という言葉で呼んでいる現象

です。自分とは何だろうか。気がついたら恋に落ちたり、愛したり、悲しんだり、喜んだり、時には「もうどうでもいいや、こんなろくでもない世の中だし」とふて腐れたり、あるいは逆に何も考えずにボーっと生きていたりするこの自分とは、いったい何でしょうか。あるいは、私たちがそうやって生きているこの世界とは、いったい何でしょうか。いま私が知らず知らずのうちに、誰からも教えてもらったわけではないのにすでにやっている「誰かを愛する」ということ、「生きている」ということ、これはいったい何なのでしょう。

こういうことを考えてみるということは、自分自身や自分が今しているそのことをより《深く》理解することです。私たちはそれを「自覚」という言葉で呼んでいます。もちろん、そういうことを掘り下げて、そこで哲学が見つける「知」は、先ほど言ったように直接に役に立つような形ですぐにこの世界やあなたを変えてくれるような何かではありません。自覚とは、もうすでにそうあった自分をあらためて見つけることだからです。

ですが、その一方で、自覚とは「本当に自分自身になる」ということでもあるはずです。たとえば、「私は自分が父親であることを始めて自覚した」という時、その人はその前後で同じ「父親」です。しかし、この時その自覚の前後で、言葉にならないような仕方でその人の何かが《根本から》変わるはずで、何がどう変わるのか、それを言葉にして言うことは難しいけれども、たしかに何かが変わる。それはたとえば、その人のちよつとした振る舞いや、言葉や、そういうものを通してふと現れてくる。「あの人が、最近変わったね——何がというわけじゃないけど、何か変わったよね」と、そういうことが起こる。それゆえ、自分自身を深いところからつかみ直すこうした「自覚」としての知こそが、じつはあなたと、あなたの生きる世界をいちばん根本から変える力なのかもしれません。哲学の求める「知」とは、そのように、あなた自身を決定的に巻き込みながら、あなたの世界をやがて《根本から》変えていく力をもつ知なのかもしれません。

ただ、その知は、いま「言葉にならないような仕方だ」と言いましたが、それをひとつの「学問」として言葉にしようとするなら、下手をすると何かとてもありきたりな、ありふれた言葉になってしまいかねない、危うい、脆い、ていねいに扱わないといけないものです。そこをどうやって、どんなふうにていねいに自分で納得し、人にも分かってもらうかというところに、「哲学」のひとつの仕事があるように私は思います。

### 三 《私》という偶然——Why-me-question

さて、そのようにして哲学が見てとろうとする事柄——「自覚」の事柄——の中に、そしておそらくその核心に、この講演のタイトルにさせていただいた「《私》という偶然」が、つまり「私がこの《私》である」という不思議な偶然があります。私がこの《私》であるということ——こんなことを徹底的に《根本から》考えてみなくても、すでに間違いなく私はこの《私》です。私は「脇坂真弥」であって、この「脇坂真弥」という《私》以外の何ものでもありません。これをいくら考えたからといって、私がこの《私》以外のものになるなんてありえません。

しかし、私はこれほど不思議な偶然はないと思います。

私はなぜこの《私》なんでしょう。私が《あなた》で、あなたが《私》でもよかった。今ここに立って話しているのはあなたで、私が《あなた》としてそこに座っていてもよかったはずなのです。どうして私が《私》で、あなたが《あなた》なんでしょう。

何を言われているか、ちんぷんかんぷんで全然意味がわからないと言われてしまうかもしれません。どうして私が《私》で、あなたが《あなた》で、その逆ではなかったのか——このことをもう少し具体的にお話してみましよう。

たとえば、田中美津（一九四三）という人が——この人はフェミニズムという女性解放運動よりもさらにひとつ前の、一九七〇年代日本の「ウーマン・リブ」という運動の中心にいた人で、現在では鍼灸師をなさっています——ずいぶん昔になりますが、次のようなことを言っています。

このあいだの橋桁の下敷きになって死んだ人たちもそうだろうと思うわ。工事に手抜きがあつて橋桁の強度が  
なとかかんとかつて原因追究されても、その人にとつても家族にとつても、どうして他の人間じゃなくつて、  
自分が、娘がそこで死ななきゃならなかったのかということが一番大きい問題だと思ふのね。人間つてそいう  
うもんじゃない？（田中、二〇〇五年、二〇頁）<sup>(2)</sup>

ここで田中が言おうとしているのは次のようなことでしょう。悲惨な事故に対して客観的な原因追究がされ、何  
が原因で橋が落ちたかが分かつて、工事会社や自治体に対して責任が問われて、彼らが裁かれて、さらには損害賠  
償が行われる。でも、被害者はそれで納得がいくということはないだろう。亡くなった人たちや家族にとっては、  
「なぜ他の人間ではなく私が／私のこの娘が死ななければならないのか。なぜ他の人ではなく、私が／私のこの大  
事な娘が、その時たまたま橋桁の下にいたのか」ということが一番大きい問題ではないだろうか。

これが先ほど言った「どうして私がこの《私》で、あなたがその《あなた》でなければならなかったのか」とい  
う問題です。これは、もちろん「原因追究などしなくていい、そんなものはどうでもいい」という意味ではありま  
せん。客観的な原因追究は、もちろん徹底的にされるべきです。ですが、被害者の本当の苦しみ、決して癒される  
ことのない真の苦しみは、「なぜあの時橋桁の下にいたのが私でなければならなかったのか。それは他の人でもよ

かったはずだ。なぜそれが私だったのか」というところにある、それを見逃してはいけないと田中は指摘しているわけです。

「なぜそれが私でなければならなかったのか」、「なぜ私はこの《私》でなければならなかったのか」——《私》という偶然をめぐるこうした問いを、英語圏では *Why-me-question* と呼ぶのだそうです。この問いは、非常に深い問い、「私」というものに関する重い自覚の問いです。この問いが典型的に現れてくるのは、この引用にある橋桁事故の例でもそうであるように、不意に、何の落ち度もないのに降りかかってきた事故や病気によって、思いもよらぬ苦しみ陥った時でしょう。

この問いに答えはあるのでしょうか。この後くわしく見るように、おそらくこの問いは普通の意味で人が納得できるような「答え」が戻ってくる問いではありません。この問いは、私の生やその中で起こる出来事にわかりやすい意味を与えてくれるような答え、慰めや対処法を与えてくれるような答えが戻ってくる問いではなく、まるで虚空に問いかけるような、問うても何も答えが戻ってこない問いです。そして、この問いに何の答えもないことが人を徹底的に苦しめます。この問いに答えがないということは、世界が根本的に不条理である (*absurd* = 馬鹿げている、無意味だ、理屈が通らない) ということを示しているからです。

#### 四 この偶然はあらゆる人の《根本》にある

この問い——「どうして私が《私》で、あなたが《あなた》で、その逆ではなかったのか」「なぜそれが私でなければならなかったのか」という問い——は引用にあつた悲惨な事故のような、ある種の極限状況で典型的に現れます。ですが、ここでもう少し考えてみたいのです。

この問いは、そういう思いもよらぬ苦しみを味わった人だけが問うものでしょうか。もちろん、典型的にはそう言えます。ですが、じつはこの問いはそういう特殊な状況に置かれた人たちだけの問いではないのではないのでしょうか。じつはこの問いは、今この時に、私たち一人一人のそれこそ《根本》に響いているはずの問いではないでしょうか。こう言ってもいいでしょう。「私がこの《私》である」というこの不思議で恐ろしい偶然は、誰にでも、つまりあなたにも私にも、今この瞬間に起こっていることではないでしょうか。そのことに少し触れてみましょう。たとえば、先ほどの田中美津は次のようにも言っています。

どう考えてもね、私を決定づけてるものって、私が選べなかった条件なのよ……。『中略』どこの家に生まれたとか、どういう顔に生まれたとかさ。人生でとつても大事なことって選べないようになってるじゃない。その上に立って選択とか何とか言ってるだけであって、もう、たまたまっていう部分がものすごく広いわけじゃない。それがわかった上で選択って言ってるだけであってね。(上野・田中、一九八七年、三〇頁)

一見自由に見える私のこの現在、そして実際にそう見えるだけではなくて、ある程度はもちろん自由な選択ができる自分の「現在」が、その根幹で自分にはどうしようもない、自分では選べなかった偶然に支配されているというところ——田中がここで言おうとしているのはそういうことです。「私を決定づけているものは私が選べなかった条件」、つまり私がこの時代に、この日本に、この家族の元に、この身体をもって生まれてきたこと——そうしたことは私が選べなかった条件です。その選べなかった条件が今の私の根幹にあります。田中はそのことを『かけがえのない私』なんだけど、それはまた、『たまたまの私』でもある」(前掲書、三五頁)とも言っています。

このことをもう少し考えてみましょう。私がこの時代に、この日本に、この家族の元に、この身体をもって生まれてきたということ——それは、要するに私が「脇坂真弥」であるということ、「私がこの《私》である」ということです。そして、それは私が選んだものではありません。同じことはあなたにもあてはまります。あなたが、その時代に、その場所に、その家族の元に、その身体をもって生まれてきたということ——それは要するにあなたが「〇〇××」という名前の人であるということ、「あなたがその《あなた》である」ということです。そして、それはあなたが選んだものではありません。

あなたがその《あなた》として生まれてくることを、あなたは選べなかった。私がこの《私》として生まれてくることを、私は選べなかった。それはあなたや私の手の届かないところで、まったく何の理由もなく偶然に決まったのです。つまり、「私がこの《私》である」という現在の私の根幹は私には選べなかったものであり、私はまさに「たまたまの私」として、あなたはまさに「たまたまのあなた」として今ここにいます。そして、この偶然は誕生の瞬間だけではなく、じつは人生のあらゆる場所で降りかかっています。「なぜそれが私でなければならなかったのか」「なぜ私はこの《私》でなければならなかったのか」という Why-me-question に通常のような納得できる答えがないとは、そういうことです。そして、そうである限り、この問いは極限状況に置かれた人だけにではなく、私たち一人一人の《根本》に響く問いであるように私には思えます。

## 五 究極の格差としての「偶然」

さて、しかしあらためて考えてみると、この「偶然」は人間に究極の格差・不平等をもたらすものではないでしょうか。

しかも、この格差はその人自身の努力や失敗によって、その人の責任と言えるような何かの理由があつて生じる格差ではありません。これは何の理由もなくたまたま各人に割り当てられる格差で、それがその人の一生を大きく左右します。私は、少なくともこの現代の日本に生まれてきたという限りで、とても運がよかった。でも、たとえば私が同じ時代に、たとえば今内戦で大変なことになっているシリアのアレッポに生まれてきていたら、私の一生はまったく違ったものになっていたでしょう。このように「私がこの《私》であるという偶然」は究極の格差をもたらします。人は生まれを選べない。生まれてくるといふそのことを選べない。これこそまさに「不条理」と言つてもいいようなものです。この不条理を、元全共闘の活動家で水俣病の問題にずっと関わり、ご自身の四番目の星子という娘さんがダウン症の重複障害を持っている最首悟（一九三六―）という人は次のように簡潔に述べています。

自分が生れてきてしまう、生れてここにいる。そしてそのことに、自分が関わっていない。（最首、一九九八年、八九頁）

このような不条理、このような究極の格差を、それゆえ人はもちろん乗り越えようと努力するし、社会全体でこの格差をできるだけなくそうとします。たとえば、ジョン・ロールズ（一九二一―二〇〇二）という著名なアメリカの哲学者が考えようとしたことはそのような努力と試みのひとつだといふことができます。ロールズは、彼の哲学の中で「無知のヴェール」ということを言います。<sup>(3)</sup> ロールズ自身の政治哲学をすべて紹介することはできないので、ここではいまお話している「偶然」の問題に関わっている「無知のヴェール」というものだけを、本当にざっとで

すが説明しましょう。

「無知のヴェール」とは、自分がどういう人間なのか一切知らない——これが「無知」と言われている状態ですが——仮定する思考実験です。自分がどういう人間なのか一切知らないとは、もつと具体的に言えば、自分の性別・年齢・経歴（育ち）・身体的／知的能力（体力やIQ）・好み・身分・社会的地位・財産などについて、一切知らないという状態です。この「一切知らない」というヴェール（覆い）を被って、「私がどういう人間なのか、ヴェールをあげてみるまではわからない」と仮定するわけです。後になってヴェールをあげた時に、あなたはもしかしたらものすごい財産を持っている資産家かもしれないし、ひよつとすると何もかも失って住むところもなくなったホームレスかもしれません。六歳の女の子かもしれないし、九〇歳のおじいちゃんかもしれない。身体や精神に障害をもった人かもしれない、スポーツ選手かもしれないし、事故で両足を失っているかもしれない——それはヴェールをあげるまでは全然わからないと仮定します。

このようなヴェールを被った状態で、そのまま考えてみて下さい。あなたはどのような社会システムを望みますか。どんな制度やルールを持っている社会に生まれてきたいですか——そうルールは問うわけです。私たちの社会に必要なルールを、ルールズはこういうふうに導き出そうとします。もちろん、ルールズがこの思考実験で前提している条件はこれだけではないので、興味がある方は調べてみられるとよいかと思います。いずれにしてもおもしろい思考実験です。

さて、ルールズはなぜこのような思考実験をするのでしょうか。もちろん、理由はいくつかあるわけですが、そのひとつは先ほど述べた「究極の格差」である「私がこの《私》であるという偶然」に関わっていると私は思います。自分がどのような社会のどのような位置にどのような資質や能力、身体を持って生まれてくるかは、みな偶然

の賜物、自然による宝くじです。さらに、そういうものは一度手に入ってもいつ失われるかわからない。私は明日事故にあつて自分が持っている能力を失うかもしれないし、今持っている社会的地位も財産もいつどうなるかは本当はわからない。それゆえ、ロールズは、こういう私たちの根本にあるくじ運の良し悪しを、「無知のヴェール」という思考実験によって一度すべて洗い落としてみて、ある種の完全に平等なスタートラインを設定し、そこをひとつの出発点として社会のルールを導こうとするわけです。

このような「無知のヴェール」の設定は、「私がこの《私》であるという偶然」を自然が各人にランダムに割り当てたものとして、つまり究極の格差をもたらずものだと考えて、一度それを無いものにする——平等にして始める——思考実験です。実際には私たちの根本にあるこの偶然は消えることはない。それでも、この思考実験によって、あなたに与えられた、あなたの自由にならなかった幸運や不運を、思考の中でだけでも一度無いものとして、みな平等なラインに並んでどんな社会を作るべきかを考えようとロールズは言っているわけです。

ですから、この点から見ると、ロールズは「私がこの《私》であるという偶然」を人に究極の格差を生み出すものとして、いったん排除しようとしていることがわかります。

しかし、私はここでもう一步奥へ進んで考えてみたいのです。

## 六 「私がこの《私》であるという偶然」は消えた方がよいか

「私がこの《私》であるという偶然」は、究極の格差、究極の不平等を生み出します。しかも、先ほど見たようにこの偶然は時に人に「なぜ私でなければならぬのか」というどうにもならない、答えの出ない苦しみまで生み出します。だとすると、「私がこの《私》であるという偶然」は、つまり不条理は、やはりなくなつた方がいいでしょ

うか。格差や苦しみの元であるような、私にはどうにもならない偶然はすべて、きれいに消してしまえるなら消してしまった方がいいものなのでしょうか。皆さんはどう思われますか。

私は、そうは思いません。「そうは思いません」と言うことは、じつは大変なこと、とても恐ろしいことなのですが、それでもやはり「そうは思いません」と言いたいのです。このことを最後にお話してみたいと思います。

もちろん、「偶然を消してはならない」ということは「私がこの《私》であるという偶然」によって現実にかかるさまざまな問題をそのまま放置してよいということではありません。たとえば、障害を持ち車椅子で移動する人には、自由に歩ける人との間を埋めるスロープが必要です。先ほどの橋桁落下でも原因追究がもちろん必要で、被害者に対する賠償や救済策が必要です。そのようにしてどうにもならない残酷な偶然を、不条理を少しでも埋めていかなければならない——ロールズの「無知のヴェール」もそのための思考実験だったわけで、それはまったく確かなことです。

ですが、そうやって、埋めて、埋めて、そのこと自体はよいし、絶対にやらなければならないことなのですが、そうやってあらゆる手を打った時に、「補償もしました、裁判も済みました、責任者や加害者は裁かれました、じゃあ、これでもういいですね、OKですね、全部済みましたね」ということになるでしょうか。

これは、多分絶対にOKではありません。あらゆる手を尽くしても「埋まらない」何かがある——それがこの「偶然」の特徴です。さつき田中美津が橋桁事故の例で言っていたのはまさにそのことでした。

そして、もうひとつ、これが私にとってはもっとも大切で、またもっとも言葉にするのが難しいところなのですが、この「偶然」はただ埋めようとしても埋まらないだけではなく、私たちが「埋めます／埋めましょう／埋まりましたね／消えましたね」と絶対に言ってはならない何かだと、私は思うのです。こう言ってもいいかもしれませ

ん。補償をし、社会のルールを変え、あらゆる手を尽くしていく時、私たちはじつはこの「偶然」を埋めているのではないのでしょうか。私たちが埋めているのは「偶然」そのものではなく、この「偶然」が社会の中でもたらず具体的な不利益です。それにもかかわらず、私たちはこうした不利益を埋めることによって恐ろしい「偶然」そのものを埋めたのだと、ついすり替えたくなります。しかし、それは決してはならないのではないか。むしろ、逆にこの「偶然」にこそ私たちの根幹が、原点があるのではないか。たとえば、先ほどの最首悟は次のように言っています。

この不条理、これこそ私たちの原点です。そこを合理的に、これこれ、こうしたら、この障害の辛さは減りますという。水俣病にしても、これで少しは辛さが減るでしょうと予想を立てる。そんなことはないんです。

……そこに私たちが手放してはいけない何かが、簡単にくくってはいけない何かがある。(前掲書、三三六頁)

どのようなことが、いろんなことが実現したとしても、障害自体どうなるもんじゃあない。そのことによって人生どうなるもんじゃあない。そのところのすれ違いが大きいのです。つまり、障害をもっていない人や行政的な立場の人の方が、あるいは一般的に物事を考える方は、どういうことをすれば障害をもつ人の環境が楽になって、そして、障害をもつ人の気持ちも少しゆるやかになるか、家族も少し気持ちがほぐれるのか、と考えたりパパッとやってしまう。生活が楽になることはいいです。ひとまずいいことです。けれど、その先は、言っちゃあいけない、というか、言うこと自体が間違っている。(前掲書、三三三頁)

ここで述べられていることは、よく考えてみると非常に不思議なことです。それが何であるかを理解するには細心の注意が必要です。最首は、一見ここで「痛い部分に触らないでくれ、この偶然はもうどうしようもない当事者の苦しみで、他人にはどうにもできないんだから、このまま苦しませておいてくれ、放っておいてくれ」と言っているように思えます。ですが、彼が言っているのはそういうことでしょうか。

もしそれだけなら、これはきつい言い方ですが、「よくあること」です。苦しんでいる人が他人の手を振り払う、「お前になんかわかるかー放っておいてくれ!」と言って振り払う。それは私たちがよく見る光景です。

ですが、ここで言われていることは少しだけ——でもその「少しだけ」が決定的なのですが——少しだけ違います。もう一度、たとえば先の二つの引用の最初のものを見てください。そこでは最後にこう言われています——「そこに私たちが手放してはいけない何かがある」。

このことはとても奇妙です。通常、このような「なぜ私がこの《私》でなければならなかったのか」という苦しみを負った当事者——たとえば、ここではたまたま水俣の漁村に生まれ、水俣病に苦しむことになった人々や、重い障害をたまたま持つて生まれた娘、その父である最首自身がその苦しみの「当事者」なのですが——そういう人々には、もし運命が自分の思い通りになるならばこのような不条理はあつてほしくなかった、こんな偶然の《私》など「手放せるものなら手放したい」「もっと別の星の下に生みたい」と心から思う瞬間があるはず<sup>5</sup>です。その願いがどれほどのものか、私には想像もつきません。

ところが、最首はこの恐ろしく苦しい「偶然」に対して、とても奇妙なことに「そこには手放してはならない何かがある」とはつきり言っています。この偶然には手放してはいけない、消してはいけない何かがある。この偶然こそグツとつかんでおかなければならない絶対に大切な何かであるということ——これはいったいどういうことで

しょうか。最首が意地になっっているからなのでしょう。彼は意地になって、自分や、自分の娘が背負った苦しみにただ執着しているだけなのでしょう。

## 七 「私」の尊厳の核としての偶然

私はそうではないと思います。最首が言おうとしているのは、おそらく、この偶然こそ、《触ってはならない》その人の究極の「わたくし（プライベート）」、他人には絶対に代われないその人の核心だということです。<sup>(6)</sup>ただし、その「わたくし」とは通常考えられているような人の個性や人格ではありません。そうではなく、私がそういう個性や人格をもった《私》としてたまたま生まれて、今ここにいるという不思議な事実そのもの、それが他人には絶対に代われない私の核心なのです。時に人を苦しめ、絶句させるこの偶然そのものが、その人の核心です。他人がこの偶然に触ってはならないのは、相手が苦しむから（痛いから）ではなく、そこそが相手のもつとも大切な尊厳の核心だから、それゆえにこそ私たちもまたそこを大切にしなければなりません。

「私がこの《私》であるという偶然」は決して触ってはならないその人の中心であり、それを誰かが勝手に理解したり、埋めたり、ましてや肩代わりすることは絶対にできません。それは私たちのあらゆる本物の苦しみと喜びの源です。この偶然がもしも完全になくなってしまったら——つまり、すべてが私たちのコントロールできるものになり、あらゆる出来事に合理的な理由や説明がちゃんとつくようになり、不条理がもしすべて消えたら——その時、私たちは本当に喜んだり、悲しんだりできるのでしょうか。私たちの本当の、まがいものではない心からの喜びや悲しみは、じつはこのどうにもならない「偶然」にこそ根ざしているのではないのでしょうか。

しかし、もしそうだとすれば、私たちはやはり分断されているのでしょうか。いま私はこう言いました——「私

がこの《私》であるという偶然」は決して触ってはならないその人の中心であり、それを誰かが勝手に理解したり、埋めたり、ましてや肩代わりすることは絶対にできない。これはつまり、今ここにいるそれぞれの人たちが、互いに理解できない、誰かに埋めてもらうことのできない、他人に肩代わりしてもらえない「私がこの《私》であるという偶然」を、それぞれ別々に、背負って生きているということです。もしそうであるとすれば、私たちはやはりばらばらに分断されているのでしょうか。このお話の最初に問うた《共にいる》という、その《共に》ということが起こる奇跡のような場所は、やはりどこにもないのでしょうか。

もし、この《共に》ということが、「あなたと私が同じ内容の経験をしている」という意味での《共に》だとすると、そのような《共に》ということが起こる場所はありません。私が経験しているこの《私》の具体的な内容は、あなたが経験しているその《あなた》の具体的な内容とはおそらく違います。私が生きているこの《私》と、最首悟が生きているであろう彼の《私》とは比べようのないほどに違います。その意味では、私たちはまったく理解しあえません。そして、この「経験内容」という次元でお互いを見ている限り、私たちは「あなたより私の方が苦しい」と考えたり、あるいは逆に自分よりも苦しそうな人間に対して同情と同時に奇妙な嫉妬さえ感じてしまう。そういう不幸比べのようなものが絶え間なく起こっているのが現代であるように、私には思えます。

ですが、私は真の《共に》が起こる場所は、そういう経験内容の比較（類似や違い）とは関係のないところにあるのではないかと思います。では、《共に》という奇跡は、それが本当に起こるのだとすればいったいどこで起こるのでしょうか。

それが起こる場所は、おそらくただひとつの次のような事実の中でしょう。それは、私にこの《私》が降りかかってきているように、あなたにもその《あなた》が降りかかってきているということ、この「偶然」が私に起こっ

ているだけではなく、隣にいるあなたにも起こっているということ、その事実です。私は《あなた》でもよかったのに、たまたまこの《私》を生きています。そして、その偶然は、私を主語にして起こるだけではなく、あなたを主語にしても起こっています。この事実に気づくということは、互いの苦しみの内容や程度がどれほど違おうとも、そのそれぞれのまったく違う《私》を誰もがみな生きているのだという「偶然」を「自覚」することです。それは、それぞれがまったく違う《私》を、決して《共に》することのできない《私》をたまたま抱えているという、その事実だけを《共に》する可能性です。このことを、先ほどの田中美津は次のように言っています。

己れの闇は己れの闇。共有しえない闇の重さの、共有しえないということ<sup>を共有して、いくしかない</sup>（田中、一九九二年、一〇二頁）

この「共有しえない」ということを共有して、いく<sup>時</sup>にはじめて、私たちは隣に本当に誰かがいることに気づきます。私とはまったく異なる経験を持った他人が、でも私と同じようにそこにいるということに気づきます。そうではないでしょうか。このことは、最初にお話したように、ひとつの《奇跡》だと私は思うのです。

現代という時代は、この「偶然」から人が目を逸らそうとする、この「偶然」をできればすべて消し去ってしまうおうとする時代であるように思えます。ひとつには科学が非常に発展して、ついにこの「偶然」の外皮に触れるところまで進んできているからでしょう。ですが、そこにはもうひとつ大きな理由があります（そして、じつはこちらが今述べた科学の発展の隠れた原動力にもなっているように私には思えます）。それはこの「偶然」の恐ろしさです。人間にとってこの「偶然」以上に恐ろしいものはない。大切なかけがえのない自分自身の根幹が、自分にはどうにも

ならない「偶然」に支配されている——これほど恐ろしいことがあるでしょうか。<sup>(8)</sup>

正直に申し上げると、私自身もまたこんなことは分かりたくありません。薄々ではなく、心底これが分かるということはどれほど恐ろしい経験だろうかと思えます。ですが、もしこれが分かった時には、それから目を背けず、ごまかさずに、それと一緒に生きていきますように、そして同じように生きる誰かが隣にいますようにと、祈るような気持ちがあります。

「ここは私が日向ぼっこをする場所だ」と言ってしまうとても弱い人間である私が、もし誰かと《共にいる》という奇跡が起こるとしたら、それはこのような「偶然」をお互いが生きているのだ、あなたにも私にもそれが起こっているのだという深い「自覚」をそのつなぎ目にしてだろうと私は思います。

拙い、またわかりにくいお話となりましたが、これで終わらせていただきます。

#### 参考文献

- ブレイズ・パスカル『パンセ』中公文庫、一九七三年
- 上野千鶴子・田中美津『美津と千鶴子のこんとんからり』木犀社、一九八七年
- 田中美津『いのちの女たちへ とり乱しウーマン・リブ論』河出書房新社、一九九二年
- 田中美津『かけがえのない、大したことのない私』インパクト出版会、二〇〇五年
- 最首悟『星子が居る 言葉なく語りかける重複障害の娘との20年』世織書房、一九九八年
- ジョン・ロールズ『正義論』紀伊國屋書店、二〇一〇年
- シモーヌ・ヴェイユ『神を待ちのぞむ』（シモーヌ・ヴェイユ著作集Ⅳ）春秋社、一九六七年）
- 中村久子『こころの手足』春秋社、昭和四六年
- 神谷美恵子『神谷美恵子コレクション 人間をみつめて』みずす書房、二〇〇四年

## 註

(1) 『パンセ』断章二九五。この言葉はフランスの哲学者であるエマニュエル・レヴィナス(一九〇六―一九九五)が取り上げたことで知られている。

(2) ここでの橋桁事故とは、一九九一年に広島市で起こった大規模な橋桁の落下事故を指す(この田中へのインタビューは同年に収録されている)。工事中の鋼鉄製の橋桁が突然落下し、下の県道で信号待ちをしていた多くの車を潰して、橋桁の上で作業していた人も含め十五人が亡くなり、八人が重軽傷を負った(久谷興四郎『事故と災害の歴史館』。あの時、から何を学ぶか)中災防新書、平成二〇年、五一―六二頁)。

(3) 「無知のヴェール」についてはロールズ、二〇一〇年、一八頁を参照。

(4) フランスの思想家シモーヌ・ヴェイユ(一九〇九―一九四三)は、これを「盲目的メカニズム」(ヴェイユ、一九六七年、八七頁)という言葉で呼ぶ。冷たい運命の歯車である「盲目的メカニズム」は、相手がどのような人間であるかをまったく斟酌せずランダムに人を選び、その人からすべてを奪う。

(5) たとえば、幼い頃の病で四肢切断という障害を負い、見世物小屋の芸人となって生きた中村久子(一八九七―一九六八)は、「病める者のみに与えられたる幸福」(中村、昭和四十六年、一七〇頁)、「病は、恩師なり」(前掲書、一七一頁)と言いつつも、同時に「あきらめよと言われて、手足の無い自分をすなおに、ハイ、そうですか、とあきらめ切れるものか切れないものか、まずおえらい方々から手足を切って体験を味わって頂いたら――と私は思います。その悲しみと苦しみはどれほどものか。六十年を手足無くして過ごした私ですが、決してあきらめ切っているのではございません」(前掲書、一九九頁)と語る。自らの障碍に対する一見まったく相反するこの二つの心情は、「お念仏によってどうにもならぬ『自分』をみせて頂く」(前掲書、一九九頁)という一点が存在することにより、中村の中でいずれにも解消されることなく、矛盾なく保たれている。

(6) 「プライバシー」という言葉をここで使うのはやや唐突だが、最首自身が「公」に対する「(この)私」という意味でこの言葉を使っているので、ここではそのまま用いる。最首、一九九八年、三三〇―三三二頁を参照。

(7) ハンセン病と生涯深いつながりを持った精神科医の神谷美恵子(一九一四―一九七九)が「らいの人」という詩の中で「なぜ私たちではなく、あなたが？」(神谷、二〇〇四年、一三九頁)と書いた時、そこにあったのはこのような自覚ではないだろうか。

(8) だが、もちろんこの「偶然」はただ単に「恐ろしい」だけではなく、先に述べたように私たちの真の「喜び」の源にもな

っている。田中美津という人間の面白さは、彼女がこの「偶然」に触れつつも、そこから目を背けずとことんまでその「偶然」を味わい尽くそうとする、人としての誠実さと、欲深いと言えるほどの胆力にあるように思う。

〈キーワード〉《共に》ということ、自覚、不条理